城西大学 Sports
秋季号
2013年11月 vol.12
城西大学の建学は創立者・水田三喜男先生
発行所：〒350-0295　埼玉県坂戸市けやき台1-1　城西大学

記者募集

記事を書いてみませんか。初心者でも大丈夫です。新聞記者経験がある職員が取材・書き方を基本から指導します。留学生も「学生記者」として活躍しています。興味がある学生、やる気がある学生、大歓迎です。写真、イラスト、漫画などで協力してくれる学生もぜひ参加してください。

連絡はこちらまで ▶ josaisports@josai.ac.jp

第90回箱根駅伝予選会
本戦出場決めた
村山 日本人トップでゴール

主将の山口

4年の平田

日本人トップ4位の村山

▶上から佐野、黒川、横田

撮影・知見寺美紀、佐久間咲、吉田美咲

第90回東京箱根間往復大学駅伝競走・箱根駅伝の予選会が19日、東京都立川市の陸上自衛隊立川駐屯地をスタートし、国営昭和記念公園をゴールする20キロのコースで行われた。この大会は各大学12人の選手が一斉スタートし、そのうち上位10人の合計タイムで争う。今回は記念大会ということで、出場枠が3枠増え、上位13校が箱根への切符を獲得した。

男子駅伝部は、今年の箱根駅伝で5区途中棄権となり2年ぶりに予選会からの参加となったが、10位で本戦への出場を決めた。

レースはスタート直後から村山紘太（経営3）が、日本人学生だた一人、他大学の留学生ランナーの集団に食らいつきそのままの勢いで日本人トップ、全体の4位でチームに貯金を作った。主将・山口浩勢（経営4）は目標としていたタイムには及ばなかったものの、チーム2位、全体24位でゴールした。

今回飛躍した姿を見せたのが、公式戦初参戦の黒川遼（経営3）だ。チーム3位、全体42位とチームに貢献した。また学年の人数が最も少ない4年生としては故障から復帰した平田啓介（経営4）に加え、急成長した佐野瑛一朗（経営4）も選手として走ったことは大きかったのではないか。チーム全体としては上位を狙っていただけに、10位という結果は悔しさが残ったようだ。

しかし、故障者も出ていたためまだチームのレベルアップが期待できる。山口は箱根駅伝に向けて「万全な状態でスタートラインに立つために、これ以上故障者を出さない」とすでに次の段階に向いている。

11年連続出場が決まった男子駅伝部。今年の箱根駅伝の悔しさは90回大会で「倍返し」してもらいたい。

【伊藤香澄】

interview　男子駅伝部

■村山紘太（経営3）

「予選会で勝てなかったことは、本当に悔しいが、日本人トップで走れたことは素直にうれしい。正直58分を切りたかったので悔しい。でもまずは予選を突破できたので良かった」

悔しいと言いながらも終始笑顔でインタビューに答えてくれた。せっかくの写真撮影なのに、と鼻水を気にしてティッシュで拭く姿も。本番でもエースにかかる期待は大きい。

■山口浩勢主将（経営4）

「目標より遅くなってしまった。個人としてチームの足を引っ張ってしまったのは、本当に申し訳ない。チームとしては5位内を予定していたが、本当にギリギリだった。でも本予選通過することができて良かった」

思うような走りができなかったようだ。しかしキャプテンとしての自覚、今回の悔しさがまた大きく成長させるだろう。

■樺部静一監督

「10位というのは不本意な結果だが、本戦出場という最低限のことはできた。年明けの駅伝では過去最大の成績を目指し、攻めの練習にこだわります」

本番の箱根駅伝までどこまでチームを追い込み、調子を上げられるか、その手腕に期待がかかる。90回の記念大会だけに「城西ランナー」の疾走を見たい。

【中村亮介】

★2面につづく

男子駅伝の3大駅伝ってなに？

出雲・全日本・箱根

箱根は関東のみ

男子の3大駅伝をみなさんはご存じだろうか。正月に行われる箱根駅伝は歴史も古くとても有名だ。しかし、男子の駅伝シーズンは、10月に行われる出雲駅伝から始まり、11月の全日本大学駅伝、そして最終章となるのが箱根駅伝で、この期間をいう。この三つの駅伝を合わせて「3大駅伝」と呼ばれている。

出雲駅伝は島根県出雲市で開催され、出雲大社正面鳥居前を出発し、ゴールの出雲ドームを目指す6区間44・5キロのコースとなっている。出場枠は、関東が箱根駅伝でシードを取った上位10チーム、東海1、関西2、中四国1、九州2の16校、学連選抜として、北海道、東北、北信越、中四国の4チームが組まれ、計20チームが参加する。

全日本大学駅伝は愛知県の熱田神宮西門前をスタートし、三重県の伊勢神宮内宮宇治橋前をゴールとする8区間106・8キロのコースとなっている。

出場枠は、前年度の全日本大学駅伝のシード校6校に加え、各地区で予選会を行い勝ち抜いたチームが出場できる。また出雲駅伝や箱根駅伝とは違い各地区の出場枠は毎年異なる。

箱根駅伝は1月2日、3日の2日間で行われ東京・読売新聞社前から箱根・箱根芦ノ湖駐車場入口間を往復する、10区間217・9キロ。のコースとなっている。出場枠は、通常、前年度の箱根駅伝でシードを取った10校に加え、10月の予選会で勝ち抜いた上位10校の計20校で行われる。今回は、90回の記念大会のため予選会の枠が三つ増え、上位13校が加えられた計23校が出場する。箱根駅伝は関東学連が主催のため、関東地区の大学だけで行われる。

一番のおすすめは現地での観戦だ。迫力もありたくさんの方が魅了されるだろう。しかしこの3大駅伝はテレビでも放送される。画面を通してでもぜひみなさんも3大駅伝をご覧になって制覇してみていただきたい。

【伊藤香澄、吉田美咲】

首都大学野球秋季リーグ戦

勝ち点とれず ほしい「あと1本」

今年の春季リーグに辛くも残留を決めた硬式野球部。これを糧に秋季リーグでの活躍が期待されたが、結局、勝ち点をとれずに終わり、下位に低迷してしまった。

秋季リーグを前に硬式野球部に「朗報」があった。これまで寮は二つあったが、新しい寮が開設された。選手が一つの寮で暮らすことで、チーム力のアップも図れる、との期待があった。

しかし、秋季リーグでは、個々の選手の調子は良かったが、1点、2点が取れず、いいところで負ける、という試合が多かった。小原沢監督も「あと一本がたりない」と課題を指摘していた。

結果は、筑波大学に1勝しただけだった。従来ならば、1部の入れ替え戦が行われるが、来季から1部が6チームから8チームに増える予定で、その場合、城西大学はそのまま1部残留になるという。

【齋藤明彦】

首都大学野球秋季リーグ戦1部

城西大	対	筑波大
4−5		
2−0		
0−7		
城西大	対	大東大
1−3		
1−2		
城西大	対	帝京大
0−2		
1−4		
城西大	対	日体大
0−5		
0−1		
城西大	対	東海大
1−3		
0−2		

記者の目

「Jスポ」認知度の広がりに手応え

2年前にJスポの記者として活動を始めた。それ以降、対応していただく運動部のみなさんや個人でスポーツに親しんでいる選手の多大な協力で、年に4回、新聞を発行している。少しずつではあるが、学内だけではなく、地域にもJスポの認知度も広がりを見せている。

取材をしていると、「なるべく大きく取り上げてください」という声が聞かれる。それだけ評価してもらえているのだろう。これまでは、「城西のスポーツ」を発信できる媒体が無かった。そうした声は、Jスポの存在感を改めて示している、と自負している。

しかし、まだ取り上げていないテーマがあるし、各運動部の活動状況の取材・掲載も十分ではないと思う。これを読んでいる読者もこれという案があれば提案していただきたい。

「城西のスポーツ」を紙面で取り上げ、読者の皆さんに知っていただき、考えてもらう。そして城西アスリートを応援する。これがJスポの存在意義だと思う。この活動に参加できたことは誇りに思う。

【久村洋介】

関東大学女子駅伝対校選手権大会

総合2位「杜の都」切符つかむ

▶2区の片貝洋美

▲アンカーを務めた茂木美優

▲大学駅伝デビュー戦で区間賞の走りを見せた和田春香

関東大学女子駅伝対校選手権大会が9月29日に千葉県印西市の千葉ニュータウン周回コースで開かれた。この大会は10月に宮城県仙台市で開かれる全日本大学女子駅伝対校選手権大会（杜の都駅伝）出場をかけた大会となっている。

6区間30・6キロで争われ、城西大学はオープン参加のチームと合わせて2チームが参加した。昨年は全日本選手権でシード権を獲得できず、この大会でシード権を持つ筑波大学、大東文化大学を除いた上位6位以内に入らなければならない。Aチームは1時間40分19秒の総合2位でフィニッシュし、19年連続20回目の全日本大学女子駅伝への出場権を獲得した。Bチームは1時間45分35秒（オープン参加のため順位なし）だった。

全員が区間10位以内

快晴の空の下行われた大会は午前9時30分にスタートした。Aチーム1区の谷町由理子（経営1）は集団の前方でレースを進め4位でタスキを渡す。2区の片貝洋美（薬4）は区間2位の走りで順位を一つ上げ3位でリレー。3区の真柳亜美（経営1）は順位をキープし、4区の橋本奈海（経営4）はコースで2番目に長い5・8キロのコースを区間3位でまとめた。5区の和田春香（経営1）は区間賞の走りで順位を二つ上げ2位で6区アンカーの茂木美優（薬2）へ。周回コースのほぼすべてを走る7・8キロのコースで、最後は両手を広げてフィニッシュした。6人全員が区間10位以内で走る安定したレース展開で、杜の都行きの切符をつかんだ。

1年生の走りに期待

5区を走った和田はこれが大学での駅伝デビュー戦だった。鈴木尚人監督からは「いつも通り走ればいい」と言われ、沿道からの声援を味方につけ楽しく走れたという。区間賞に関しては「全く狙っていなかったし、取れるとも思っていなかったので本当にびっくり」と本人も驚きの様子。それでもまだ満足できる走りはできていなかったと言い「自分がもっと頑張れば目標の優勝に届いたのでは」と悔しさも口にした。

10月27日の全日本大学女子駅伝については「周りから区間賞を取れ、と言われるが、そんな甘くないので区間賞を取ろうと思わず、チームにいい流れを作れるよう一生懸命走り、それがチームや個人の結果にいい形で出てくれたらうれしい」と語った。今大会ではA、Bチーム合わせて1年生が4人走ったが、それぞれ物おじしない積極的なレースを見せており、これからの女子駅伝部に大きな期待がふくらむ大会となった。

【知見寺美紀、写真】

interview　城西大卒業生

ホクレン女子陸上競技部
赤羽有紀子 選手
赤羽周平 専任コーチ

がむしゃらに取り組めるものを見つけよう

城西大学の卒業生で日本の代表的な女子長距離ランナーである赤羽有紀子選手と赤羽周平コーチが、城西スポーツ新聞に大学時代の思い出などについて書面インタビューの形で寄稿して下さった。

■赤羽有紀子プロフィール
http://www.hokuren.or.jp/track/player/player01.html
■赤羽周平プロフィール
http://www.hokuren.or.jp/track/player/staff07.html
■オフィシャルブログ「笑顔と素直な心」
http://ameblo.jp/redwing36/

――城西大学で陸上競技に取り組んだ頃の思い出はなんですか。

赤羽選手　やはり何と言っても全日本大学女子駅伝です。1年時と3年時と2度優勝することができました。私は故障が多く、毎年大変な思いをして駅伝を迎えていたのですが、優勝した瞬間は、辛かったことすべてを忘れる程の達成感がありました。現在もそうですが、学生時代にも多くの方に支えられ競技を続けることができていましたので、常に感謝の気持ちを忘れずに、そして笑顔を大切にしようと心がけていました。城西大学での競技活動があったからこそ、今の自分があると思っています。

赤羽コーチ　私は高校時代まで中距離（800メートル）を専門としていましたが、城西大学入学を機にマネージャーに転向しました。副主務、主務として部の裏方全般をしていただいていました。学生幹部としての活動で学んだことは、今のコーチ業に多々生かされています。思い出としては、やはり関東インカレの1部校残留争いでしょうか。

――アスリートにとってオリンピック五輪出場は大きな目標です。その思いについて語ってください。

赤羽選手　本気でオリンピックという舞台を目指そうと決心したのは、2005年の秋でした。結婚した2005年から考えたらコーチとなったのですが、夫の指導を受け始めてからたった半年で5000メートルの自己ベストを6年ぶりに更新することができたのです。その時のタイムが、オリンピックのA標準記録まであと数秒で、夫から「絶対に標準記録を突破できる」と言われました。それまではオリンピックなど夢の舞台であって、実現できる目標と考えたことはなかったのですが、夫の言葉をきっかけにオリンピックの舞台が私の目標となりました。

2006年に娘を出産していて、出産後復帰と競技の両立は大変でしたが、絶対にオリンピックの舞台に立つんだという強い気持ちを持ち続けました。

私は2008年の北京オリンピックに10000メートル5000メートルの2種目で出場していますが、あの舞台は「特別な場所」だと感じました。アスリートとして、最高の舞台です。その舞台で走れたことは、私にとって一生の宝物です。

赤羽コーチ　妻と同じく、参加標準記録突破が見えてきたことでオリンピックを本気で目指すようになりました。

海外では出産後に記録を伸ばしている長距離ランナーが珍しくありませんでしたので、所属先にも話し合い、出産を経て2008年の北京オリンピック出場を目指すということを決めました。

北京オリンピックを経験して感じたことは、アスリートや指導者が頂点を目指す以上、オリンピックこそが頂点を決めるにふさわしい最高の舞台であるということです。

――2020年に東京でオリンピックが開催されます。

赤羽選手　あの興奮を日本で味わえると思うと、今からワクワクしてしまいます。7年後というと私は40を過ぎますし、娘は学生です。ぜひ娘を連れて、東京オリンピックを観戦したいと思います。娘がその時にどんな反応をしてくれるのか、今から楽しみです。

赤羽コーチ　指導者側からすると、最高の目標ができたと考えています。東京オリンピックに自分が関わる選手を出場させる。実現は簡単なことではありませんが、7年かけて挑戦するに値する素晴らしい目標だと思います。

――コーチとして大切にしていることはなんですか。

赤羽コーチ　私は「みんなちがってみんないい」という言葉を大切にしています。競技活動・指導方法に関しては、「これが絶対に正しい」などという方程式はありません。アプローチの仕方は、10人いたら10通りのやり方があって良いと考えています。自分の考えや個性を大切にして、徐々に大事な局面で迷わず自己判断ができるような競技者、人間に育ってほしいという思いを持って日々指導しています。

――最後に城西大学の後輩たちへ一言、お願いします。

赤羽選手　苦しみながら走ったインターバル走や、寝過ごして練習に遅れて先輩に怒られてしまったこと。親元を離れての初めての寮生活でちょっぴりホームシックになってしまったこと……。どれも良い思い出です。

私には長距離ランナーとして「一番になりたい」というシンプルな目標がありました。その目標に向かってがむしゃらに駆け抜けた4年間だったと思います。ぜひ皆さんもがむしゃらになって取り組めるものを見つけてみてください。

赤羽コーチ　私は自分の走りの限界を感じた時に、自分が走って一番になれないのならば、一番になれる可能性のある選手のサポートをしようという決断でマネージャーとなりました。自分が好きで一生懸命取り組めるモノに出会ったと言えます。

成功を思い描くこと、それを行動に移すこと。怖がらずに前に進んでみましょう。ぜひ成功も失敗も味わって、有意義な学生生活をお送りください。

取材スタッフ

編集長　経営学部4年　久村　洋介
経営学部4年　伊藤　香澄
経営学部4年　中里　絵美
経営学部4年　大久保匡留
経営学部4年　服部　哲大
経営学部4年　萩原　洋輝
現代政策学部4年　小柳　寛和
経営学部3年　宮本ひろみ
経営学部3年　佐久間　峻
経営学部3年　中村　亮介
経営学部3年　知見寺美紀
経営学部3年　関原　彩賀
薬学部3年　齋藤　明彦
薬学部3年　小峯　大輝
現代政策学部3年　野島　慧
経営学部2年　吉田　美咲
薬学部1年　巻幡　仁美
薬学部1年　松岡　直史

アドバイザー

2012年度卒業　原　駿介
寺田　登
嶌　優紀
金子　亮
江田　悠真
2011年度卒業　千葉　史典
安富美里香

Jスポ フェイスブック はこちら ▶ http://www.facebook.com/JOSAISPORTS

陸上 日本インカレ 400メートル相山が3位 1600メートルリレー7位入賞 城西大新記録

▶1600㍍リレーは城西大新記録達成

▶400㍍で表彰台に上がった相山（右）

▶10000㍍競歩7位の割田

▶100㍍8位の山口

9月6～9日の3日間、東京・国立競技場で日本学生陸上競技対校選手権（日本インカレ）が行われた。

男子は100㍍で山口竜哉（経営2）が8位入賞、400㍍で関インカレで8位に入賞した相山征之（経営4）が4年生の意地を見せ3位となり表彰台に上った。10000㍍競歩で割田仁志（経営4）が関東インカレに続き7位に入賞した。

堀井浩介（経営1）、相山征之（経営4）、本間圭祐（経営3）、佐藤拳太郎（経営1）がバトンをつないだ1600㍍リレーでは、城西大学新記録、日本選手権リレー標準を突破し、7位に入賞した。

1500㍍で松田司（経営3）はシーズンベストで予選を通過し8位入賞。5000㍍で村山紘太（経営3）が前日の10000㍍の悔しさを晴らし7位に入賞した。女子は10000㍍橋本奈海（経営4）が9位と惜しくも入賞を逃した。【吉田美咲】

400㍍ 相山征之 大学ラストイヤー 初の表彰台

相山征之（経営4）は47秒07で3位に入り、これが初めての表彰台だった。しかし「表彰式の時間が短く、表彰台に乗ったという実感がなかった」と少し残念そうだった。それでも大学ラストイヤーとなった今シーズンは5月の関東インカレで8位、6月の個人選手権で6位と安定した結果を残した。その要因については「昨年の冬季からしっかり練習が積めたことと、筋力強化のためのトレーニングをしたことです」と2点を挙げた。その筋力強化としてウエートトレーニングを取り入れたという。その結果「400㍍としての走りが身についてきた」と話す。将来については「日本選手権の標準記録を今年中に切って、最終的には日本代表になるように頑張りたい」とさらなる上のステージでの活躍を誓った。

1600㍍リレー 7位入賞 個々の力着実にアップ

陸上競技大会で最も盛り上がる競技が1600㍍リレーである。城西大学は予選で3分6秒61の大学新記録を出し、決勝では3分11秒03で7位に入賞した。

1走を任された堀井浩介（経営1）は「頑張るしかない」と思っていたが、大学に入ってからのタイムがあまりよくなく不安だったという。「でもみんなが励ましてくれたので、その期待に応えなければ」と語る。しかし「予選のときは我ここにあらずという感じですごく緊張していた」と言い、レース前は話しかけられてもうなずく程度だったという。それでも予選のスタート前には先輩から言われた決めポーズをするなど笑顔が多く見られた。

2走の相山征之（経営4）はオープンレーンになるところで積極的に前に行くことを意識しており「予選は2レーンだったので位置取りをあまり考えずそのまま前に出るようにした」と語る。

3走（決勝は4走）の佐藤拳太郎（経営1）は「今シーズンふがいない走りばかりで迷惑をかけていたが、調子も上がりやっとチームに貢献できた」と話す。5月には病気で400㍍やリレーが走れないのではないかというところまでになった。「それでもリレーは自分の中で特別だから最後まで出たいと思い、400㍍を走れるまで戻した。その結果が日本インカレで出たのかなと思う」と笑顔だった。

4走（決勝は3走）の本間圭祐（経営3）は、日本インカレ3日間でこのリレーを含め7レースを走った。日本インカレの合宿の際にアキレス腱を痛めた状態ではなく、レース中すっとアキレス腱が痛い状態だったという。また左膝にもけががあり、それを押しての出場だった。リレー予選終了直後には倒れ込み「アキレス腱が切れそうだった」と限界に近いところでのレースだった。予選が終わった時に本間は一佐藤のおかげだった」と口にしたが、「いつもは後ろの方でバトンをもらうことが多く、追い込んで前にいる選手を抜かなければならない展開。しかし今回は佐藤がラスト100㍍でスピードに乗ってきてトップでバトンを渡してくれたので、いつもとは違う心持ちで走れた」と語った。

相山と本間は5月の関東インカレでも1600㍍リレーを走ったが「関東インカレの時はレース展開がよくなく、最後まで下位の方で走っていたが、日本インカレでは個人がしっかり走ることにより、自分たちのレース展開を作っていくことができた」（本間）「ラップタイムを見てもそれぞれ速くなっていて個々の力が上がってきた」（相山）と個々の力が上がったことにより、チームの結果につながったと振り返った。

本間は来シーズン主将としてチームを率いる立場になる。「それぞれ全員がしっかり走れば決勝を狙えるライン」があったので、そこをシーズン終わりに確認して自標を持って、来年の関東インカレの決勝を見越して練習に入ることを心がけさせたい」とチーム全体の士気をあげる方針を示した。また個人では「100㍍と200㍍で大学に入ってから決勝に残れていないので、主将として出る種目すべてで決勝に残れるようにしたい。対校得点を稼いで関東インカレ部残留をしたい」と、来年の関東インカレでも多くのレースでの活躍を誓った。

100㍍ 山口竜哉 8位入賞 さらなる飛躍誓う

山口竜哉（経営2）は8月に10秒37の自己ベストを出し、今大会の予選でその記録を100分の1更新する10秒30を出すなど順調に決勝に進出した。好調の要因は「あまり欲を持たず走ることだけを考えた。記録を狙わずポイントを持った走りをすることを意識した」という。しかし決勝のレースで残り20㍍付近で太ももの肉離れを起こしてしまった。やってしまったと思ったのと同時に「調子がよく勝てたのに」と思ったという。それでもけがに対しては「悔いはなく、まだ来年もある」とポジティブに捉えた。けがはよくなり走れるようになっているが「今シーズンは走ることまだけがつながる可能性があるので、冬季練習を積んで来シーズンの大会で表彰台を狙っていきたい」と意気込んだ。

100㍍ 野川大地 卒業後は世界狙う

今大会は予選敗退となった野川大地（経営4）だが、7月に肉離れをしてなんとか個人種目に間に合わせた状態だったという。1600㍍リレーにも出場予定だったが「練習も積めていなかったので、予選は後輩たちに任せて決勝だけ走る形にしたが、予選敗退となってしまい自分のけがでチームに迷惑をかけてしまった」と悔やんだ。5月の関東インカレで6位に入ったが「春先は調子が悪く全然タイムが出なかったが、去年やってきたことを見返して、なにが足りないのかなどを考えて調子を上げて関東インカレに間に合わせた」という。6月の個人選手権で自己ベストをマークして2位となったが「関東インカレでタイムがよくなかったので、そこからまた練習を積んで個人選手権で自己ベストを出せた」と成長が見られた。今シーズンはオリンピックや世界選手権に出場した選手と同じレースを走る機会が多かったが「自己ベストを出しても上には上がいて、力不足を感じた。自分もそのレベルにならなければと思った」と刺激を受けた。大学卒業後は「日本代表になって世界と羽ばたいていきたい。東京オリンピックもあるのでそこまで頑張りたい」と将来を見据えた。

10000㍍競歩 割田仁志 7位入賞 将来につながる走りを

7位に入賞した割田仁志（経営4）は、今シーズン好調を維持しているが、昨年はあまり結果が残せていなかった。「昨年までは出された練習メニューをこなすだけだったが、今年は4年生で先頭に立ってやることになり、自分や競歩ブロック全員で練習メニューを考えてやることが多くなった。自分たちで考えて行動することが大きく変わった」と練習での変化が良い結果につながったという。

割田は高校から陸上を始めたが最初は長距離選手だった。しかしあまり結果が出ず2年の時に監督からすすめられて競歩を始めた。2戦目が高校総体の県予選で優勝し、そこから競歩での道が開けたという。大学に入って1年目は続けることが目標だったが、日本インカレの標準記録を切ることができ、そこから目標が関東インカレや日本インカレでの入賞に変わった。2、3年目は試合に出るだけになってしまったが、4年目は良い結果を残せるようになったという。この冬に試合があり「そこで世界選手権の標準記録を切り、将来につなげていきたい」と語った。【知見寺美紀、写真も】

interview 男子駅伝部

★1面から

■黒川遼（経営3）

「10位通過ということで記念枠が無かったら落ちていた。チームとして故障者や調子が上がらない選手が多く、他大学に比べ遅れを取っている部分がある。本戦までの期間で万全のチーム状況に仕上がるように自分自身も自覚を持ってまた一段階成長して臨めるように頑張りたい」

■横田良輔（経営3）

「予選は通過したが、この結果には満足していない。自分はこのチーム十分に戦える思っていたが、まだまだ力不足だった。

何が自分たちには足りなかったのか見つめ直し、本戦では強くなったチームを見せたい」

■平田啓介（経営4）

「予選会は絶対に通るという思いで走った。10位ではなく上で通過したかった。しかし通ったことにはほっとしている。

本戦では9年連続で箱根を走っていて、4年連続走った先輩は少ないので、この勢いで4年連続走りたいと思う！」

選手らが口を揃えて言ったのは10位通過といった結果が悔しいということだった。これから約2カ月、日々の練習を含め選抜合宿等で成長した彼らの箱根路を走る姿を期待したい。【吉田美咲】

関東学生ソフトボール秋季リーグ戦 男女ともに優勝

男子 秋10年ぶりV

10月5、6、14日に群馬県高崎市で開催された第13回関東学生ソフトボール男子1部リーグで、男子ソフトボール部が4勝1分けで優勝を果たした。秋季リーグでは10年ぶり、春季を合わせて3回目のリーグ優勝だ。5戦無敗とはいえ、そのうち2勝はサヨナラ勝ちという僅差の試合が多いリーグ戦だった。

優勝をかけた最終戦の国際武道大学戦は、最終回まで3点ビハインドという苦しい展開だったが、下位からの打順にもかかわらず打線がつながり、一死も取られることなく追いつき、最後はここまでリーグ戦無打だった笹本（現代政策2）のサヨナラ打で優勝を決めた。投げては大出（経営3）と黒沢（現代政策2）が粘り強いピッチングで失点を抑え、安定感ではリーグ随一のチームであったと思う。

今回は秋からの新チームだったが、引退する4年生が1人だけということもあり、他大学に比べると完成度は高かった。来春のリーグ戦、インカレ予選には各大学ともチーム力を底上げしてくるので、個々のスキルアップを通じて、チーム力の更なる向上を目指してほしい。【石井雅章】

女子 新チーム初V

10月12日から14日にかけて、第13回関東学生ソフトボール秋季リーグ戦が行われた。4勝1分け、得失点差わずかだったが、優勝を勝ち取った。今大会は、4年生が引退し3年生が主力の新チームとなって、初めての大会だった。

しかし、新チームはキャッチャー以外のメンバーは変わっていないのが強みだった。このため、優勝しなければいけないというプレッシャーはあったが、選手らは「優勝すること以外考えていなかった」と話した。

今大会では、メンバーの中で、守備位置の変更があったケースもみられた。それでも優勝したことに選手一人ひとりの能力・質の高さを感じた。

東京国際大学との試合では勝ち試合であったが引き分けてしまった。もう二つ勝負強さの必要性を感じた。それを踏まえ「チームが安定する春の大会では完全優勝を成し遂げたい」と選手らは目標を語りながら、最大目標である来年の全日本選手権の優勝を目指すと意気込んだ。【佐久間崚、関原彩貴】

全関東学生弓道選手権大会 戸塚が6位入賞

今年の弓道部は、全関東学生弓道選手権大会と全日本学生弓道選手権大会では、予選通過が果たせなかった。だが、個人では全関東大会で戸塚祐史（理2）が6位入賞という結果を残した。

また、中関東1部リーグ戦は第3位となり1部残留が決まった。戦績は、千葉工業大と国際武道大に勝利、埼玉大と大東文化大に敗れ2勝2敗。

課題は、「一発勝負」に弱いところだという。それが全関東大会や全日本大会で出てしまった。今後は、この弱点を克服して強いチームになること が目標だ。【大村洋介】

ゴルフ 関東大学秋季対抗戦 Cブロック6位

9月4、5日に狭山市の東京ゴルフ倶楽部で行われた関東大学秋季Cブロック対抗戦に臨んだゴルフ部。春季と同じ6位に終わり、Bブロック進出はかなわなかった。

春に引き続き、主将の笠原瑞城（経営4）、弟の将揮（経営2）、悠揮（経営1）の3兄弟を含め6人が出場した今大会。8月の関東学生ゴルフ選手権で64位タイと健闘した将揮や瑞城の頑張りで初日は3位につけたが、2日目はスコアを伸ばせなかった。

新チームは内田佳吾（経営3）を新キャプテンに新たな一歩を踏み出している。瑞城は「今のレベルではBブロック昇格は難しい。他大学は2日目にスコアを伸ばしてくる。自分の力を試合で発揮できる能力をつけることが大事。今後の練習で、どれだけ自分を追い込めるかが、来年春の対抗戦のかぎを握る」と後輩たちに希望を託した。

サッカー場が人工芝に 関東復帰へ士気高まる

総合グラウンドのサッカー場が人工芝に生まれ変わった。短期大学創立30周年、薬学部創設40周年、城西大学創立50周年の記念事業のつとして整備された。

人工芝は、城西国際大の高円宮殿下記念スポーツパークのサッカー場と同じ「ハイブリッドターフ」で、住友ゴムの関連会社が施工し、8月初旬に工事を始めて10月中旬に竣工。トラック内の約1万平㍍が、緑鮮やかな人工芝になった。

「人工芝のグラウンドが完成する！」と選手たちの士気も高まっているようだ。サッカー部の猿山誠監督は「水田理事長をはじめ、学長及び大学関係者には大変感謝しています」と感謝の念を示し「念願の人工芝になってうれしい。選手のけが防止に役立つほか、土埃で校舎が汚れることもなくなるうえ、高校の選手が本学を選んでくれるメリットもある。また、地域の子供たちにも使ってもらいたい。選手たちには『これから頂点を目指そう』と言っている。そのためにも関東リーグ復帰を果たしたい」と決意を語っている。【松岡遊史】

健康相談 保健センターから

「ノロウイルス感染症」に注意しよう

感染性胃腸炎は1年を通して発生していますが、冬季に流行する代表的な感染症です。特にノロウイルスを原因とする場合、集団生活の場で大規模な流行となることがあり注意が必要です。

ノロウイルスは、100個以下の少ない量でも感染が成立する、感染力の強いウイルスです。症状がある人の便や吐物には、大量のノロウイルスが含まれていますので、二次感染にも十分な注意が必要です。

■症状

潜伏期間1～2日

嘔気・嘔吐／下痢／腹痛／発熱（37℃台）／頭痛など

■感染経路

▽感染した人の便や吐物に触れた手指を介して

▽便や吐物が乾燥して、細かなちりと一緒にウイルスを体内に取り込んでしまう

▽感染した人が十分に手を洗わず、調理した食品を食べる

▽ノロウイルスを内蔵に取り込んだカキやシジミ等の二枚貝を、生または不十分な加熱処理で食べる

■感染拡大を防ぐには

▽最も大切なのは手洗い。特に排便後、また調理や食事の前にはせっけんと流水で十分に手を洗いましょう。

▽吐物の処理は、熱湯あるいは次亜塩素酸ナトリウム（市販の漂白剤）を使用しましょう。

▽食品は中心部まで十分に加熱しましょう。

※疑わしい症状が出現したら、早めに医療機関を受診し適切な治療を受けてください。

いざというとき「AED」を

学内でAED（エー・イー・ディー）と書かれた器械を見かけることはありませんか。AEDは、突然の心停止を起こした人を、そこにいる人たちがその場で使って人の命を救うことができる医療機器です。

初めての人でも簡単に使えるように設計されています。取り出すと音声が次にするべきことを指示してくれます。人が倒れたときなどは、一人ではなかなか冷静に的確に対応できないケースも考えられます。AEDの使用とともにそばにいる人に声をかけ、119番への通報なども含め、役割分担することも大事です。夏合宿前に学生を対象にAEDの講習会を開いています。

■設置場所

保健センター入り口▼体育館受付▼1号館～4号館の各1階▼6号館1階、413教室▼10号館～13号館の各1階▼16号館～18号館の各1階▼食堂「アイビーシーエス」「丸正」「いこい」の各1階▼硬式野球部、男子・女子駅伝部合宿所▼硬式野球場

Column スポーツファーマシスト

〝うっかりドーピング〟から選手を守る薬剤師

薬学部准教授 上田秀雄

「スポーツファーマシスト」という存在をご存じだろうか。「競技者を含めたスポーツ愛好家などに対し、薬の正しい使い方の指導、薬に関する健康教育などの普及・啓発を行い、スポーツにおけるドーピングを防止すること」を主な活動とする、薬剤師に対して（公財）日本アンチ・ドーピング機構が認定する制度だ。

ドーピングというと、競技で好成績を挙げるために「筋肉増強剤」や「精神興奮剤」などの薬物を故意に使用することと思われがちであるが、日本におけるドーピング陽性事例の多くは、意図せず摂取した医薬品等による〝うっかりドーピング〟であるといわれる。ドラッグストアなどで購入できる一般用医薬品であったとしても、風邪薬をはじめ、花粉などのアレルギー物質が飛散する季節には鼻炎薬や抗アレルギー薬など、陽性として検出される可能性の高い医薬品が多数存在する。医師の診断に基づいて事前に「治療目的使用の適用措置」（世界アンチ・ドーピング規程）を受けておけば、医薬品の使用が認められる国際ルールも定められており、このような手続きを含めたアンチ・ドーピングに関する正しい知識の啓発が必要である。

2013年4月現在、約6,000人の薬剤師がスポーツファーマシストの認定を受け、その認定を受けて活躍している本学出身者も多くなりつつあると聞く。たとえば、本学薬学部31期生、風間望さん（（株）アトラク取締役）は、〝うっかりドーピング〟の防止とスポーツファーマシストの認知度向上を目指したプロジェクトチームとして「ｔｅａｍ ＮＯＮ（チームのん）」（http://team-non.com/index.php）を立ち上げ、メルセデス・ベンツ トライアスロンチームに所属しながらアスリートとしても活動している。風間さんは活動を通じて、「いつ、どんな時にアスリートは薬を必要とするのか」、「アスリートのために薬剤師は何ができるのか」を考えていきたいそうだ。

この9月には2020年のオリンピック・パラリンピックの東京開催が決まった。7年後を目指すアスリートの活躍が期待されるだけでなく、一般に目を向けてもスポーツはますます盛んになっていくだろう。世間からは、「薬剤師は病院または薬局にいる人」というイメージであるが、アンチ・ドーピング活動を通じてスポーツを愛する人たちに寄り添うこともできる。このような活動によって、医薬品の供給や薬事衛生を通じて「国民の健康な生活を確保」することが期待されている薬剤師の懐が深くなっていくのかもしれない。